

論 文 内 容 要 旨

シェーグレン症候群患者における唾液分泌量と
う蝕経験歯数との関係

神奈川歯科大学

臨床講師 妹尾 真理子

(指 導 : 岩 渕 博 史)

論文内容要旨

緒言：う蝕の少ない人は多い人に比べ唾液分泌量が多い傾向があるなどう蝕と唾液分泌量との関係を示す報告が以前よりなされている。一方、シェーグレン症候群（SS）では、う蝕発生率の高いことが横断的研究によって示されているが、唾液分泌量の増加が SS 患者のう蝕を予防するという報告はない。そこで唾液分泌量の減少程度とう蝕経験歯数(DMF)の増加程度との関連性を明確にすることと、唾液分泌量増加が DMF 増加を抑制するかどうかを明らかにすることを目的に後ろ向き研究を行った。

方法:対象は定期的に診療を行っている SS 患者のうち、症状が安定している 165 名とした。なお、唾液分泌促進薬服用患者も対象に含めた。唾液分泌量の指標は観察開始時と終了時の 10 分間ガムテストの平均値（平均唾液分泌量）、観察開始時と終了時の 10 分間ガムテストの差（唾液分泌量変化値）とした。また、観察開始時と終了時の D、M、F、それぞれの差を D 変化量、M 変化量、F 変化量とした。統計解析は平均唾液分泌量および唾液分泌量変化値と D、M、F 変化量との相関関係を Spearman の検定にて求めた。さらに喪失歯数増加に影響する因子を求める目的で、ロジスティック回帰分析にて多変量解析を行った。なお、本研究は NHO 栃木医療センター倫理審査委員会にて承認を得た（承認番号:2018071905、承認日：2018/7/27）。

結果：平均唾液分泌量と M 変化量との間に弱い負の相関関係が認められた($P=0.047$ 、 $r=-0.155$)。唾液分泌量変化値では、D、M、F 変化量の何れとも相関関係はみられなかった。また、M 変化量は D 変化量および F 変化量との間に負の相関関係が認められた(D: $P=0.011$ 、 $r=-0.197$ 、F: $P<0.001$ 、 $r=-0.531$)。多変量解析では平均唾液分泌量と唾液分泌促進薬服用期間が喪失歯数増加の危険因子であった($P=0.043$ 、OR=1.014、 $P=0.028$ 、OR=0.914)。

考察：歯の喪失に関与する因子として唾液分泌量の減少が浮き彫りになった。さらに、M 変化量と F 変化量の間には負の相関がみられたことより、喪失歯の多くは、処置済み歯が欠損したことを示唆していた。口腔乾燥症患者では根面う蝕の増加や修復物の辺縁にう蝕の再発しやすいことが報告されており、本研究でも処置部位が二次う蝕となり、その一部が抜歯に至ったものと考えられた。また、本研究では喪失歯やう蝕歯の増加に対して唾液分泌量の増加が抑制的に働くという結果は得られなかった。本研究における唾液分泌促進薬服用患者は唾液分泌量の安定している患者を対象としているため、全体で見ると唾液分泌量変化値が高くないことが今回の結果の一因ではないかと考えられた。結論：SS 患者では唾液分泌量の減少が喪失歯を増加させるが、わずかに唾液分泌量を増加させるのみでは DMF は減少しないことが示唆された。